

Title	自由11 ニホンザルオトナメスによる出自家系離脱がもたらす変化に関する研究(VI 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	浜井, 美弥
Citation	霊長類研究所年報 (1996), 26: 91-91
Issue Date	1996-11-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/164808
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

自由10

高崎山のニホンザルの繁殖個体の採餌時の
積極的行動と周囲の反応
横田直人（大分短大）

繁殖状態にあるメスは、出産に伴ってエネルギー要求量が増大することが知られている。これまで高崎山のB群のオトナ雌を対象に、出産個体と非出産個体（出産しなかった個体）との間に、餌場内での人工餌摂取量に違いがあるかを調べてきた。本研究は同様の雌を対象に、山の中での食物摂取量の調査を行った。食物摂取量は、社会的順位性を考慮して、オトナ雌の出産個体と非出産個体の較差を検討した。

山の餌（人工餌を除く）の摂取エネルギーをみると、出産個体（ $N=4$ ）は出産期間に1.25倍、授乳・育児期間で1.20倍、離乳期間で1.15倍と非出産個体（ $N=8$ ）を上回る傾向を示した。これまでの人工餌からの摂取エネルギーも同様の結果を示したことと合わせて、出産個体は出産にともなうてより多くのエネルギーを必要としていると考えられる。また、同一個体について、出産年と非出産年の摂取エネルギーを比べてみた。下位個体（ $N=2$ ）は出産年で約50kcal上回ったのに対して、上位個体（ $N=2$ ）は大差なかった。しかし、出産期、授乳・育児期および離乳期の3つの時期に分けてみると、上位個体は授乳・育児期に非出産年より多くのエネルギーを得ていた。これに対し、下位個体では出産期に非出産年より多くのエネルギーを得ていた。出産個体の山の中での行動は、摂取エネルギーを増加させるため、特定個体への追従によって餌獲得を有利にしていた。今後も観察個体を増やして同様の調査を継続する。

自由11

ニホンザルオトナメスによる出自家系
離脱がもたらす変化に関する研究
浜井美弥（日本モンキーセンター）

平成7年8月1日～13日の13日間、地獄谷野猿公苑（長野県・下高井郡）で野外調査を行った。調査対象の餌付け群志賀A1では、1990年から分裂が進行中である。9～16歳のオトナメスたちの中から、母親（生存中）と異なる群れを選んだメス3頭（トビラ、トビヨ、メバミ）と、その2歳下の妹で母親と同じ群れにとどまった3頭（トマノ、トビム、メバコ）の3ペア、さらに母親が死亡している姉妹でも分裂した1ペア（ナデシコ、ナガノ）と、計8頭を150分ずつ個体追跡した。

それぞれの個体から5m以内に近接した個体、さらに近接中に起こった敵対的・親和的な交渉を比較したところ、母親のいない群れに移った個体については、非血縁のオスまたは母親以外の血縁者（祖母、おばなど）に接近し、積極的に毛づくろいのような親和的な交渉を持つ傾向がみられた。また、血縁集団の大部分が残る主群から離脱した個体が多く集まる小さな分裂群では、二者が拮抗したり、身体接触を伴ったりするような、より消耗する形の敵対的な交渉が多く観察され、とくに離脱後新しい群れでの相対的な順位が高くなった個体が目だっていた。